2021年度　ソニー幼児教育支援プログラム
保育実践論文

カブトムシと子どもたちの成長

～たくさんの不思議、驚き、感動との出会いを通して～

株式会社　ロック・フィールド
元気の木保育室
特定非営利活動法人e-kids運営受託

目次

１．はじめに ―――――――――――――――――――――――――――― １

元気の木保育室について
食育
異年齢保育
「科学する心を育てる」について
取り組みのテーマ

２．カブトムシとの出会い ―――――――――――――――――――――― ３

お家づくり
カブトムシ博士に教えてもらったよ
毎日のお世話
名前が決まったよ！
新しい仲間がきたよ！
悲しいお別れ

３．幼虫との出会い！ ―――――――――――――――――――――― ７

土の入れ替え
うんちの不思議
幼虫をもっと身近に
蛹室作り　～色が変わってきたよ～
さなぎになったよ
他施設との交流　～みんなで一緒に育てたいな～
いよいよ脱皮を始めました！
成虫とのご対面！
カブトムシとの触れ合い
再び、お別れと出会い ！

４，もうひとつの 不思議、神秘、感動との出会い ―――――――― 17

５．まとめ ―――――――――――――――――――――――――― 18

育まれた生命を尊重する心
自然との関わりや体験を通した心の育み
子どもの未来を守る環境

６．考察に基づく課題と今後の方向性 について ―――――――― 20

７．さいごに

１．はじめに

元気の木保育室について

神戸市東灘区にある、食品会社である、株式会社 ロック・フィールドの企業内保育室として、元気の木保育室がある。保育の運営は特定非営利活動法人e-kidsが受託している。自然あふれる園庭で子どもたちは毎日駆け回ったり、虫や草花と触れあったりしながら身体をいっぱい動かして元気に過ごしている。菜園活動など食育に力を入れ、「いっぱい遊んで　いっぱい食べて　生きる力を身につける」を保育理念とし、心身ともに健やかな子どもを育てている。年間を通しては、二十四節気を大切にしながら、食べもの、虫、動物、樹木や植物、自然現象などを子どもたちが感じられるように保育を行っている。

保育室のシンボル「元気の木」は、神戸市の震災10年イベントで子どもたちの人気を集めたすべり台を市より譲り受けたもの。

園庭の一角に畑がある。自然あふれる園庭で、毎日いろいろな自然物を発見をしながらのびのびと遊んでいる。

食育

食品会社の保育室として、力を入れているのが食育活動である。園庭の一角に菜園があり、会社の方のご協力のもと、子どもたちが種や苗を植え、毎日水やりをし、育てている。育てた野菜を自分たちで収穫し食べる。自分で育てたものを食べることで普段は食べられないものを食べられるようになる子どもも多い。毎日少しずつ生長していく野菜を観察し、「花が咲いたよ！」「赤ちゃんのスイカができてるよ」「（虫食いのあとを見て）あ、誰かがカボチャ食べちゃった…」など、子どもたちにとって畑は発見と驚きの宝庫である。

また、二十四節気に基づき、旬の食べ物や食べ物の持つパワーについて知り、子どもたちと一緒に簡単な調理（コロナ禍の影響で制限あり）を行っている。野菜を触ったり、匂いを嗅いだり、切ったものの中身を観察したりという五感で感じる活動を取り入れながら、「食は生きる力の源。さまざまな食体験を通して健康なこころとからだを育みます」という方針の実現に向け、日々保育に取り組んでいる。

異年齢保育

元気の木保育室の園児は、乳児10名、幼児4名合わせて、合計14名。クラス分けはせずに異年齢保育を行っている。年上の子どもが年下の子どもを気にかけ、自然とお世話をしたり優しくしてくれる姿が見られる。また年下の子どもは、お兄ちゃんお姉ちゃんの姿を見て、憧れを持って同じようにしたい！と刺激を受けている。

ある時、園庭で遊んでいる2歳児に、保育士が室内に入ろうと誘いかけても遊びに夢中でまったく動こうとしなかったが、4歳児が「Kちゃん行こう！」と誘い掛けると、「うん！」とすぐに立ち上がり急に動き出した。子ども同士の力は本当に大きい。別の2歳児は、最近入園してきた1歳児が大好きで、お世話をすることが楽しみで毎朝登園してくるなど、たくさん刺激を受けながら、子どもたちが相互に成長していく姿が見られる。

「科学する心を育てる」について

元気の木保育室の子どもたちは、目の前に広がる自然豊かな園庭で毎日遊んでいる。季節により変わっていく木々や草花。その景色や彩りを見て変化に気づき（視覚）、春は野鳥のさえずりに耳を澄まし、夏はセミの鳴き声、秋にはコオロギの鳴き声を聞く（聴覚）。畑に植えた野菜や草花の匂いを嗅ぎ（嗅覚）、収穫したものを食べる（味覚）。また、芝生の上を転がったり、虫や動植物を触ったりする（触覚）。このように「五感」を存分に活用しながら毎日を過ごしている。

園庭にある畑に夏野菜の苗植えをしている時のことである。2歳児が土の中にミミズを発見し、興味深くじっと眺めていた。**「なんでこんな形をしてるんやろう」「なんでこんな風に動くんやろう」**という驚きや不思議を感じたこの瞬間に、子どもの心の中に沸き起こっている感覚こそが大切であると考える。

またある日、プランターの下にダンゴムシがいるのを保育士と一緒に見つけた1歳児。次に園庭に出ると、**「これどけて！」**と保育士にプランターを動かすように言ってきた。ダンゴムシに出会い、興味を持ち、経験から学んだことで、「何とか捕まえたい！」「やってみたい！」と主体的に関わろうとする姿は大事に育てていきたいことである。

幼児になると、園庭に生息する野草を見つけ、**「きれい！」**とカップの水にいれたり、花束にしたりしていたかと思うと、自ら図鑑を持ってきて名前を調べ始めている。**その名前を知りたい、物事をより深く知りたい**という知的好奇心が芽生えてきている。興味を持ったこと、好きなことは気が済むまでできるように見守り「知りたい」気持ちをどんどん刺激していってあげたいと考える。

自然を通して何かを発見し、五感を使って感じ、予測しないその変化や動きに、**「すごい！」という驚きや感動、「なんで？」という不思議や疑問**が生まれ、またそこから誰かに知らせたいという、**人と関わろうとする気持ち、やってみたいという意欲が生まれる**。このように**心を動かし、子ども自らが関わって感じることが**「科学する心を育てる」ということであると考える。

この心は、目の前にあふれる自然を通して、たくさんの経験をして、子ども自身が心を動かすことで育まれていくと考える。このような経験は、どんな事前準備をした保育にもかなわない。子どもたち自身が、自ら関わって感じることを大切にしている。

取り組みのテーマ

これまで保育室では、園庭にいるダンゴムシやセミ、トンボなどを捕まえて、少し観察して逃がしてあげることはあったが、長期間生き物を飼育したことはなかった。

昨年夏に、関連施設から2匹のカブトムシを譲っていただくとお話を受けたとき、しっかりとお世話できるだろうか、育てていけるだろうかと考えた。子どもたちとも話し合い、大切な命をお預かりするということを心に留め、飼育を開始することにした。

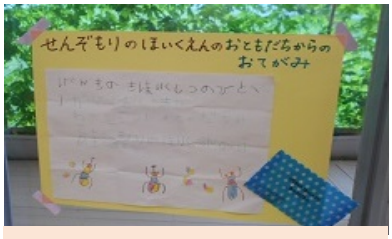
飼育をするために、何が必要かを調べ、会社の方にもご協力いただき、スタートしたカブトムシとの生活のなかで、子どもたちが何を感じ、何を学んでいくのか、またそこからどのような成長を見せてくれるのか、保育士も手探りの状態だった。

そして、1年が経った今、振り返ってみると、カブトムシの飼育や成長を通して、保育士たちも想像し得なかったたくさんの**発見、驚き、疑問、神秘、感動**との出会いがあった。**子どもたちが心を動かし自ら関わっていく姿が「科学する心を育てる」という主旨に合致したため**、テーマとして取り上げた。

2．カブトムシとの出会い

2020年7月

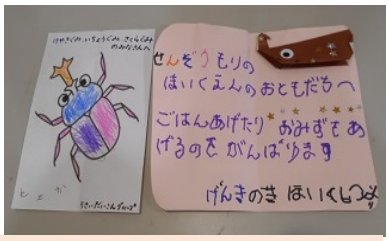
ある日、一通の手紙が保育室に届いた。たくさんのカブトムシが羽化した関連施設である千僧 森のほいくえんからだった。**「カブトムシってどんな虫？」**とピンと来ない表情の子どももいたので早速図鑑でカブトムシを探してみることにした。



『げんきのきほいくしつのひとへ
カブトムシのおせわをてつだってください』

「これがカブトムシか～」
「知ってる知ってる！」
「かっこいい!」「強そう！」

子どもたちは、興味津々で図鑑を食い入るように見ていた。
そして、みんなでどうしようかと相談した結果・・・「飼ってみたい！」
「じゃあ、お返事書こう！」幼児たちが、手紙を書き、図鑑や折り紙の本を見ながら折ったカブトムシや塗り絵も添えた。
図鑑の中でしか見たことのない虫に「どんな虫だろう？」と想像力を膨らませワクワクしている様子が見られた。



『ごはんをあげたり、おみずをあげたりするのをがんばります
げんきのきほいくしつより』

カブトムシを迎えると決まると早速準備を開始した。

お家づくり

「カブトムシさんのお布団！喜んでくれるかな？」

「カブトムシさんはお水で濡れているところが好きなんだって！」

タライに入れた土を飼育ケースに自分たちで入れていった。乳児は主に土入れを、幼児は「ここまで入れたらストップだよ」「水はこれぐらいでいいかな」と**自然に役割分担**しながら準備を進めることができていた。
幼児の姿を見て、乳児も真似をしてやってみようという気持ちになり、幼児も自分がお手本になっていることを意識している様子だった。

そしていよいよ当日…朝一番に登園してきた子どもたちが飼育ケースの中のカブトムシを発見し、朝の支度をすることも忘れ「あー!!」と駆け寄ってきた。

カブトムシ
いた～!!

【考察】
一通の手紙から始まったカブトムシとの出会い。「カブトムシって何？」から始まり、カブトムシを迎えるためには何が必要かみんなで考えた。
自分たちで「飼いたい！」と決めてワクワクしながら準備をし、まだ見ぬカブトムシへの思いを膨らませて登園してきた子どもたち。朝の用意などそっちのけで「新しい仲間」を歓迎する姿は、子どもが「**自ら動く**」「**好きなことを選ぶ**」といった主体性を尊重した結果、生まれた姿だと考えられる。
異年齢保育を行っているため、役割分担しながら、幼児が乳児を思いやり自分たちができることをしてあげようとする姿は普段から見られる。共に過ごす喜びや思いやりが育まれている姿である。
さらに、届いた手紙の向こうにいる会ったことのない友だちに対し、どんな顔？どんな声？どんな保育園にいて何をして遊んでいるのだろう、と思いを馳せることは、子どもたちの想像力を刺激したと思われる。

カブトムシ博士に教えてもらったよ

カブトムシがやってきた日、会社の方がカブトムシの飼育に必要なものを準備して、保育室に駆けつけて下さった。日頃から会社の方々が保育室のことを気にかけ、いろいろとお世話してくださる恵まれた環境にある保育室。畑に野菜を植えるときは「野菜博士」が来てくださり野菜について教えてもらう。それなら今回は「カブトムシ博士」。「カブトムシのこと教えて下さい！」とお話を聞くことにした。

カブトムシ博士からの教え

其の一
自然の世界と少しでも近づけてあげるために登り木や落ち葉を入れてあげること。

其の二
湿った場所が好きなので霧吹きで湿らせてあげること。

其の三
カブトムシをつかむときは体の横側をつかむことが良いが、オスの場合は小さい方のツノを持っても大丈夫。大きいツノを持つと頭ごと取れてしまうので持たないこと。

其の四
ゼリーをあげるときは、ゼリー置き用の木の穴にいれること。土の上に置くとカブトムシがひっくり返してしまってすぐに土まみれになってしまうよ！

また、保育士に向けても、カブトムシの爪は鋭いので子どもたちの腕などにつかまらせないように気をつけること、なかなか動かない時はお尻をそっと押してあげると良いということなどの注意点も教えてもらった。

【考察】

カブトムシ博士の話を聞く子どもたちの目は真剣そのものであった。この眼差しに子どもたちの興味の強さを感じた。

早速、カブトムシをつかんでみようとする子どもたちだが、目の前の動く虫になかなか触れない。何度も何度も触りかけては手を引っ込める。大人はこれまでの経験から、触ると硬いのだろう、持つと足を動かすぞと予測がつくが、経験のない子どもにとっては、図鑑でしかみたことのない虫を触ることは大冒険なのだろう。でも、誰もがこのような冒険を体験することで、感性を磨いていく。この初めての冒険をしたときの喜び、驚き、感動、もしかしたら恐怖もあるかもしれない、これこそが**科学する心の芽生え**なのではないだろうか。宝物に触れるようにそっと触ってみようとする姿が印象的だった。きっと幼いながらも**命を尊重**することに気づくきっかけにもなったはずだ。

また、企業内保育施設の特性として、保育士以外に会社の方々との関りが深い。子どもたちもそれを自然な形で受け止め、親しみを持って関わる姿が見られる。自分たちのことを大切にしてくれて見守ってくれているのだということに気づき、感謝の気持ちを持つことができるように、この日もみんなでカブトムシ博士に心を込めてお礼を言った。このように、「ありがとう」と**感謝の気持ち**を持ったり、人に対して**安心**や**信頼**を憶えたりするなかで、「**人と関わる力**」も身についていくと考えられる。

毎日のお世話

カブトムシを観察することが毎日の日課になった。

カブトムシが来てから、朝登園してくると、まずカブトムシを見に行き、ゼリーの交換や霧吹きなどお世話をしてくれる姿が見られた。朝登園時に泣いている子どもも「カブトムシ見に行こう！」と声を掛けると不思議と泣き止むことがあった。

最初は恐る恐る触っていた子どももだんだんと慣れ、上手に持てるようになってきた。まだ直接触れない子どもは葉っぱの上に乗せてもらい大満足な様子。 間近でゼリーを食べる様子や木に登っていく様子を見たり、カブトムシ博士が言っていたように、カブトムシの脚が当たると痛かったり。実際に触れ合うことでしか味わえない経験をする毎日だった。

乳児のこの表情！

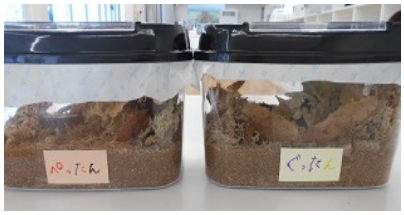
【考察】

カブトムシを観察している子どもの表情は真剣で、まだ言葉を話せない乳児も「**不思議だなぁ**」「**面白いなぁ**」と感じているように見える。

この表情から、興味を持った対象に出会ったときには、言葉で感情を表せない乳児の心にもさまざまな感情が沸き起こっていることがうかがえる。誰もが生まれながらにして持っている、**神秘さや不思議さに目を見張る心**を呼び覚ます体験をすることで子どもの豊かな感性は育まれる。

カブトムシに出会い、それぞれにさまざまな感情を経験し、感じたことで、次は**お世話をしたい、触ってみたい、もっとよく見てみたい**と**自発的な行動**へと繋がっている。「感じて動く」これこそが真の「感動」なのだ。

名前が決まったよ！



毎日お世話をするうちに、「カブトムシさんってお名前がないね」という話になり、考えることになった。

1歳児が、生き物を何でも「ぺったん（自宅で飼っている犬の名前…ぺっちゃんのこと）」と言うのを聞いた5歳児が、「ぺったんにしよう！」と決めた。「もう一匹は？どうしよう？」「うーん…」と考え「ぐったん！」

「ぺったん、ぐったん」語呂が良く子どもたちもすぐに覚え、ますます愛着がわいたようだった。

新しい仲間がきたよ！

　カブトムシ博士とはまた別の会社の方が、保育室にカブトムシがやってきたことを聞いて、見に来てくださり、「オスだけじゃかわいそうやなあ」とメスを２匹連れてきて下さった。それとほぼ同時期に、ご家族でカブトムシ捕りによく行かれる保護者の方も、「今度カブトムシを捕りに行くのでメス捕ってきますよ！」とメスを２匹持ってきて下さった。

【考察】

　会社の方、保護者の方がメスのカブトムシを下さったことは、**人と人がつながることの温かさ**を感じられる出来事だった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の「社会生活との関り」のなかに「人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。」とある。今回のカブトムシとの出会いは、**他園の子どもと保育士、会社の方々、保護者との関りへと広がった。**

　幼い頃から人との関りを感じる体験をすることは、今後の子どもたちの人生において非常に重要なことである。幼い頃に人とのつながり、温かさを感じられた子どもはその後の人生においても良好な人間関係を築くことができるようになるだろう。元気の木保育室の子どもたちはそういった意味でも大変恵まれた環境で過ごすことができていると言える。

悲しいお別れ　　2020年8月

　毎日お世話をしたり、触れ合ったり楽しく過ごしてきたカブトムシ。ある朝、いつも元気だったカブトムシが動かなくなっていた。「動かないよ？」と不思議そうに言う子どもたち。保育士から、「もう死んでしまったんだよ」という話を聞いても今ひとつピンとはこない表情だ。でも、「もう動かなくなってしまったから一緒には遊べないんだよ」と話すと、悲しそうなガッカリした様子で優しく背中を撫でてあげる子どももいた。

　みんなで園庭の隅にお墓を作って埋めてあげようと提案すると、「うん、わかった！」とスコップを持ってきて穴を掘り、カブトムシを入れ、そうっと上から土をかけてくれた。園庭に咲く朝顔の花を取り、埋めた場所に乗せてあげる優しい姿も見られた。

【考察】

　興味や関心を持って、エサをあげたり、霧吹きで土に水をかけてあげたり、日々のお世話を繰り返すうちに子どもたちは、カブトムシに愛着を持ち、「自分の大切なもの」と思うようになった。

　毎日楽しみに登園し、観察し、触ってみたり、友だちや保育士とカブトムシについて話をしたりしてきた。その大切なものが突然動かなくなってしまう。どこまで子どもたちが理解しているかは分からない。もちろん年齢的に理解できない子どももいる。もしかしたら、今動かないだけでまたすぐ動き出すと思っている子どももいるかもしれない。だが、死んでしまったものはもう決して動かない。きっと**初めての「生き物の死」**という経験だった子どもも多かっただろう。たとえ、本やテレビのなかで「死んでしまいました」という場面を見て知っていたとしても、**実際に感じること**には全くかなわないであろう。

　「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中の「自然との関わり・生命尊重」における子どもの姿として、「身近な動植物に愛着をもって関わる中で、生まれてくる命を目の当たりにして感動したり、時には死に接したりし、生命の不思議さや尊さに気付き、大切にする気持ちをもって関わるようにもなる。」とある。日常生活のなかで「命」に接することで、子どもたちは**命のかけがえのなさ**を学んでいくのである。

　このような観点からも、「カブトムシの死」は今後の子どもたちの心の成長のなかで重要な経験となったにちがいない。今回、多くの子どもは動かないカブトムシを見て悲しむというより、「**なんで動かないの？**」と**不思議**に思っている様子だった。保育士が「もう動かないんだよ。かわいそうだね」と悲しみ残念がる様子を見て、何かを感じ取ってくれていることを願う。

３．幼虫との出会い

2020年10月

メスのカブトムシが亡くなってから、カブトムシが暮らしていたケースの中を見てみることにした。もしかしたら卵が生まれていないだろうかと、子どもたちも保育士も小さな期待をしながら土の中を探した。ゴソゴソと土をかき分けてみると、なんと、中から次々と幼虫が発見されたのである。卵の状態はすっかり通り越して、立派な幼虫の姿に出会えた。カブトムシとの別れに、誰もが寂しさを覚えている中での嬉しい出来事であった。大小9匹もの幼虫を見て、「わぁ～、すごーい！」と子どもたちも保育士も驚きで大興奮。モゾモゾと動く不思議な生き物に釘付けになった。

幼虫の姿を見て、存分に親しんだ後は、「みんなで幼虫さんのお家を作ってあげよう！」と保育士の提案で新しいお家を作ってあげることになった。新しいフワフワの土に少し水を加えて混ぜる。子どもたちはスコップを取りに行き夢中で混ぜていた。その後も遊ぶことを後回しにし、積極的に幼虫をケースに入れるのを手伝っていた。

幼虫を土の上に乗せると、モゾモゾと動いて、すぐに土の中に潜り込む。「もっと見たいのに～」と子どもの声が聞こえてきた。すっかり幼虫に心を奪われてる様子の子どもたち。名残りを惜しみながらケースに移し替えていた。

【考察】

全ての成虫がいなくなり、土の中から幼虫の姿を確認した瞬間、子どもも保育士も口から出た言葉は「わあ～!! すごい！すごい！」だった。驚きと感動に出会い、その場にいた全員が興奮状態だった。**感動を一緒に共有できる人が周りにいることの素晴らしさ**を実感した瞬間だった。感じたことを誰かと分かち合うことで感性はさらに磨かれる。このような機会を与えてくれた自然の神秘に感謝したい。

また、今まで見てきたカブトムシとは色も形も全く違う幼虫たちを「カブトムシの赤ちゃん」だと認識すると急に親しみを持ち始めた。子どもたち自身もつい数年前に“赤ちゃん”と言われ、かわいがられて育ってきた。たっぷりと愛情をかけてもらい大切にしてきてもらった経験があるからだろうか。赤ちゃんは小さくてかわいくて、まだ弱いものだということを無意識のうちに感じ、優しく、お世話をしてあげようという様子が見られた。

幼虫のお家を作るために、遊ぶことを後回しにし、夢中で土を混ぜる姿に、死んでしまったカブトムシから受け継がれた命のつながりを大切に育てたいと願う**生命尊重の心**が感じられた。

土の入れ替え　2020年10月～2021年３月

幼虫の間は、土の中に潜ってばかりでなかなか姿は見えないが、それでも子どもたちは毎日ケースを見て幼虫を観察していた。「ここにいるよ」「あっ、いたね！」「今日はいないね～。見えないね～」と子どもたちにも幼虫の姿がしっかり分かるようになってきた。10月から3月ぐらいまでは、月に1回土の入れ替えをした。子どもたちもふるいを持って、綺麗な土とうんちを分けてくれた。

土の入れ替えをしながら、「幼虫さんって土を食べるんだって～」「土っておいしいのかな？」「え～、おいしいのかな～？食べたことないから分からないね」「土をいっぱい食べた方が大きくなるんだよ」「じゃあいっぱいあげないとね」と、どんどん会話が弾む。

幼虫を直接触ると人間のばい菌がついて弱ってしまうということを保育士が話すとしっかり理解し、誰も触ることはしない。みんな幼虫たちのことを大切にしている様子がうかがえる。

絵本『かぶとむしは　どこ？』
（1990）松岡　達栄　作　福音館書店

カブトムシの一生が迫力ある大画面で描かれている。1年間の中で何度登場しただろうか。子どもたち自身で「読んで！」と保育士の元に持ってくるお気に入りの絵本である。カブトムシの成長過程を見るのはもちろん、成虫になった後のカブトムシとクワガタの戦いなど臨場感ある描写に、子どもたちはカッコいい虫なんだと、憧れを持ちながら、本の中に引き込まれていた。

突然走って室内に入り、何かを取りに行ったかと思うと、カブトムシの絵本だった。同じ幼虫だと確認していたのだ。

【考察】

実際に子どもと一緒に土の入れ替えをすることで、子どもたちから次々と感じたことや疑問の声が上がった。幼虫のごはんが土だと知り、「おいしいのかな？」と不思議に思ったり、土を食べることによって大きなカブトムシになることを聞き「じゃあ、いっぱいあげないとね」と言ったり、目の前にいる幼虫のことを思うからこその発言だ。大きくなってほしいという願いから「いっぱいあげないと」と思ったこの子どもの言葉に、**自分たちと同じ生きる力**があることを知ったのではないかと考える。

子どもたちは、いつも絵本で見ている幼虫と見比べ、「同じだ」と気付いた。**「あ！」と気づいた瞬間のひらめき**こそが、私たち保育士が大切にしたいことである。「ほら、同じだよ」と保育士が絵本を持ってくるのではなく、**自分で気づくこと**が何より子どもの感性を育てるのである。

また、感じたり、知ったりしたことを、保育士や友だちと共有することは、子どもたちに生まれつき備わっている感性を常に新鮮に保ち続ける。感動を分かち合ってくれる人が側にいるということは幸せなことだと感じるだろう。このような共通体験を通じ、子ども同士の**仲間意識**も芽生えてくると考えられる。

うんちの不思議

土の入れ替えをしているときのことである。保育士が土をふるいにかけているのを見て、「やってみたい！」と興味を示した子どもたち。ふるいに残る小さな塊を見て「これは何？」と疑問を持つ。保育士から「うんちだよ」と知らされると少し嫌そうな表情になった。だが、実際に匂ったり触ったりすると「**あれ？臭くない！**」と気付いた様子。

そして、その後…幼虫の身体から何やらムニューっと茶色いものが出てきた。よく見るとうんちだった！「わ～！うんち出てきた～！」と盛り上がる。子どもたちは日頃からうんちに興味津々だ。絵本『みんなうんち』＜（1918）五味太郎作　福音館書店＞　が大好きでボロボロになるぐらい何度も何度も読んでと持ってくることからもうんちへの興味の強さがうかがえる。

子どもたちにとって、身近で、なおかつ不思議な存在であるうんち。目の前で次々出てくる様子に「また出てきた～！」とくぎ付けになった。「うんち、コロコロしてるね」「めっちゃ、いっぱいうんちしてるー！」「(指で押してみて)う～ん、かたい！」「つぶれないよ！」子どもたちの口からはうんちに対する感想や疑問がどんどん出てきていた。

目の前で幼虫から出てくるうんちに驚きじっと見つめる3歳児

飼育ケースのなかにあった大量のうんち

動いている幼虫よりもうんちに夢中な1歳児。

普段からひと味違う視点で遊びを発明するこの園児。ふるったり、握ったり、つぶしたり、投げたり。長い時間、真剣な表情でうんちを触っていた。誰も入っていけないほどの集中力だった。

【考察】

子どもたちは、ふるいに残った塊を見て「これはなに？」と不思議に感じたのだろう。この「**なに?**」と思う気持ちこそが子どもの感性を磨くうえで最も大切にしたい部分である。うんちだと分かったあと、大人が「うんちだから汚い」などの先入観で処理してしまっていたら、そこで子どもの感性の成長は止まってしまう。子どもたち自身で匂ったり触ったり、五感を使って確かめることで、子どもたちの思っているうんちと違うことに気付き、**面白い**、**不思議だ**、とまた興味を持つことができた。

うんちに夢中だった1歳児。動く幼虫に目もくれず一心にうんちを触り続けていた。言葉で話すことはまだできないが、何かが心に響いたのだろう。自分の知っているうんちとは違うぞ、面白いなと好奇心をくすぐったのだろうか。こうしたらどうなるんだろう？と思考力を働かせながら実践しているようにも見えた。本児の心のなかは分からないが、この集中力に**小さな科学者**を見た気がした。

子どもたちと一緒に土替えや、うんちの処理をすることで、子どもたちの素直な言葉が聞こえてきたり、何に興味を持っているかということが見えてきたりする。子どもたちの発言や行動を見逃さずに拾っていくことは、我々**保育士の感性**にかかってくる。

幼虫をもっと身近に　2021年4月

　日々成長していく幼虫に夢中な子どもたちのために、専用の観察ケースに引越しすることにした。奥行の狭い容器なので、幼虫の動きや成長過程が見やすく、子どもたち自身で発見したり、気づいたりすることを期待して用意した。何度も経験している土の入れ替え。子どもたちが、自発的に準備を進めてくれた。
　観察ケースに変わってから、幼虫の姿がよく見えるようになり、子どもたちは今までよりも一層熱心に幼虫を観察するようになった。朝一番にケースをのぞき込む姿は、まるで幼虫に「おはよう」と言っているようで微笑ましいものだった。

幼虫の動きやさなぎになる様子などが観察しやすいつくりになっている

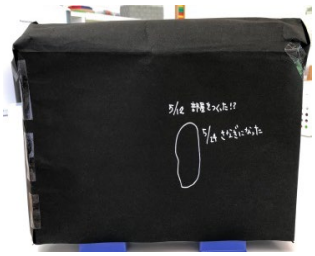
引越し完了。少し狭そうであるが、幼虫の変化を見られることに子どもたちも保育士もワクワクした。1歳児の子どもも毎朝「むいむい～（見よう）」と保育士に訴え、じっくり観察をしていた。

【考察】
　今までの飼育ケースでも、もちろん育てていくことは可能であったが、今回このケースを使用することで、土の中で生きる幼虫の姿をさらに身近に感じられるようになり、変化にも気づけるようになった。
　子どもの発見や気づきを引き出すための環境づくりは、**保育士の感性**にかかってくる。今、子どもが何に興味を持っているのかを見極め、適切な環境を整えたことで、ますます子どもたちは幼虫に夢中になっていったといえるだろう。
　幼虫を見ている子どもの目はキラキラし、幼虫が少しでも動くと、「見て！」と保育士に伝えてくる。このように、子どもの心が動くときには、必ずと言っていいほど、友だちや保育士などに**共感**を求めてくる。この思いを受け止め、一緒に感動したり驚いたりすることが、「**もっと見たい**」「**知りたい**」そして「**伝えたい**」という**意欲**につながっていくと考えられる。誰かと喜びを共有し合いたい、その思いが言葉になり自分の思いや考えを伝えようとする「言葉の伝え合い」へと繋がっていく。（幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿より）

蛹室作り　～色が変わってきたよ～

2021年5月

　5月になり、幼虫の様子に変化が見られてきた。毎日観察しているからこそ、小さな変化も見逃さない子どもたち。「**なんか丸くなってきたよ！**」「**色が変わってきてるよ**」と幼虫の変化を報告してくれた。確かに白かった体が段々茶色くなり、動きも鈍くなってきた。観察ケースから見える幼虫の周りの土が丸く空洞になってる。　今どの成長段階なのか、絵本を開いてみた。「あれ？これお家じゃない？さなぎになるためのお家を作っているよ！」

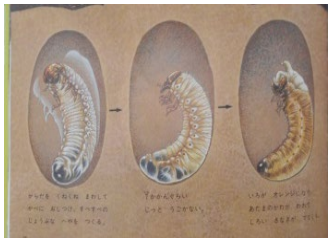


どこに蛹室があるか、いつ作ったかがわかるよう印をつけた。

　幼虫が作ったとは思えないほどきれいな丸い形に、子どもも保育士も「どうやって作ったのかな？」「幼虫さんすごいね！」と驚くばかりだった。

　また、蛹室を作り始めた時期にケースを優しくトントンとノックすると、急にくるっと向きを変える姿が見られた。その姿はとてもユーモラスで子どもたちもニコニコしながら眺めていた。

絵本『カブトムシの音がきこえる』（2018）
小島　渉　文・廣野　研一　絵　福音館書店
　前出の「かぶとむしはどこ？」よりもさらに掘り下げた内容が書かれている一冊。
　幼虫は腐葉土が分解されるときに出すCO2に集まる習性があるので幼虫が出すCO2にも反応し幼虫同士群れになっていることや、さなぎの体内はドロドロの液体になっていて、新しい器官を作り直すことなど、驚きの情報がたくさん書かれている。書いている内容は高度ではあるが、子どもの興味を引く絵で子どもたちも絵本棚から取ってきてじっと見る姿が見られた。



さなぎになったよ

　もうさなぎになるだろうと予測してからも幼虫は蛹室を作る最適な場所を探しケース内を動き回っていたが、ようやくさなぎになった。茶色くなったさなぎの姿に子どもたちは「**チョコレートみたい！**」と喜んでいた。さなぎになった後も、時々、ムニョムニョと動く様子が見られた。
　この神秘的な姿を子どもたちと保育士だけで見るのはもったいないと保護者の方にも見ていただいた。初めて見るさなぎの姿に「ちょっと苦手だけど、すごい！」と驚いた様子だった。

【考察】
　お迎えの保護者に「見て！さなぎになったんだよ」と得意そうに知らせる子どもの姿があった。保護者の驚く反応に子どもたちも大満足。家に帰ってからも共通の話題ができ、みんなで関わることの楽しさを味わい、保育士以外の大人の想いを知ることにもなる。
　このように、周りの大人が、同じように、驚きや神秘、喜びなどを一緒に発見することで、子どもたちの中の**興味や関心の幅を広げていく**のだと考える。

他施設との交流　～みんなで一緒に育てたいな～

2021年5月

　昨年夏に他施設からもらった命の繋がりを、たくさんの子どもたちと分かち合い感動を共にしたいと考えるなかでの出来事だった。
　朝の会で、「千僧 森のほいくえんにはカブトムシがいないんだって」と保育士が子どもたちに話をすると、**「あげたらいいやん！」**と4歳児が言ってくれた。「ほんとに！？じゃあ、連れて行ってあげてもいい？」**「うん！」「いいよ～！」**と他の園児も快く賛成してくれた。保育士たちが思っていたことを、子どもたちも同じように思ってくれたのだろう。4歳児と子どもたちの優しさに、その場がとても温かい雰囲気になった。
　9匹の幼虫のうち、特別大きな3匹を別のケースに1匹ずつ分けて育てていたので、昨年、オス2匹を譲ってもらった千僧 森のほいくえん、そして幼虫の飼育を希望する伊丹 森のほいくえん、とよなか文化幼稚園にそれぞれ1匹ずつお届けすることになった。一緒に育てたいという子どもたちの想いを形にしたいと、保育士が４歳児に他施設の友だちに手紙を書くことを提案。以前、「お世話を手伝ってくれませんか?」と手紙をくれたことを思い出し、今度はこちらから「描いて届けたい！」と大張り切り。カブトムシと一緒に手紙も届けることになった。

　子どもたちが帰った後、職員が各施設にカブトムシを届けた。さなぎが動く様子を他施設の先生方が見て、「すごい！」と感動してくれた。翌日、他施設の子どもたちにカブトムシを紹介する様子を、動画と写真に撮って送ってくれたので、保育室の子どもたちと一緒に動画や写真を見ることにした。まだ会ったことのない友だちであったが、驚いたり喜んだりする様子を見て興味を示していた。

【考察】
　最初にカブトムシを飼うきっかけをもらったのは、千僧 森のほいくえんだった。「お世話を手伝ってくれませか？」という手紙をもらったり、当時の5歳児が返事を書いたりしたことを覚えていたのだろう。4歳児は、仲間という存在を意識し、「他施設の友だちも育ててみたいのではないか」「毎日の成長の喜びを見せてあげたい」という気持ちから、今回譲ってあげることを自ら提案したのではないかと考える。「昨年譲ってくれてありがとう」という**感謝する心から生まれた思いやりの心**であると考えられる。
　現在この4歳児は、保育室では最年長であり、保育室のお姉さん的な存在である。年下の子どもたちもいつも優しく接してくれるこの園児を慕っているため、影響力があり、今回のように年下の子どもたちも賛同したのではないだろうか。このように保育室内では、年上の子どもの自発性、自主性が日々の保育の中で活きている場面が多々見られる。これからも、年下の子どもが良い影響を受け、優しさや思いやりを持ち、「〇〇ちゃんみたいになりたい！」という思いを持つこと、そしてそれがまたさらに年下の子どもへの影響力につながっていくことが考えられる。**異年齢保育だからこその成長**だと考えられる。

いよいよ脱皮を始めました！　2021年5月末

　ある日、前日までくねくねと動いていたさなぎたちがピタッと動かなくなった。「大丈夫かな・・・」と心配そうな子どもたち。子どもたちも職員たちも、無事に成虫になってくれるか少し不安になってきていた。

一生懸命羽をたたもうとする他施設のカブトムシ。真っ白な羽がだんだん茶色くなっていく様子がわかる。

他施設では…
　一足先に、羽化を始めているとのことだった。カブトムシの成長を定期的に共有しあっていたこともあり、大ニュースとして羽化する様子を写真や動画に撮ってSNSにアップしてくれたのだ。とても神秘的で、なんとも言えない不思議な感覚に包まれる映像であった。

　その日は金曜日、職員が帰宅後、送られてきた動画を観る中で、もしかすると元気の木のカブトムシたちも羽化を始めるのではないだろうか・・・と不安が頭をよぎった。しかし、保育室は土日が休みである。ケースには土がいっぱいに入っているため、他施設のようにカブトムシが羽化して土から出ようとしたら蓋に当たってしまう。羽化する際に、羽化不良で亡くなってしまうことがあると聞いていたため、心配になった施設長は、カブトムシたちを家に持ち帰り、動向を見守ることにした。
　するとやはり夜中に羽化を始めたのだ。残念ながら子どもたちとは一緒に見ることはできなかったが、ケースの中のさなぎたちは、子どもたちのよく知っているカブトムシの姿に変わっていったのである。

今回、カブトムシの羽化の様子を観察できればと、露天掘り（蛹室の上の土を少し取り除く）をし、上から見られるようにしていた。

何度もくるくると回りながら、少しずつ皮を脱いでいるカブトムシ。

　保育士自身が、この生命の力と神秘的で感動的な瞬間に心を奪われてしまった。今まで生きてきて初めての体験である。さなぎから羽化する、という知識はもちろん持っていた。だが、大人になると知識が先行してしまい、神秘を感じる場面に、なかなか出会わない、いや、気付かなくなるのかもしれない。
　カブトムシの羽化に立ち会い、**「知る」ことでなく心で「感じる」経験**をすることが、いかに大切か実感した。大人がこれだけ感動するくらいであるので、子どもたちが、もしこの瞬間に立ち会うことができれば、いったいどんな反応や表情を見せてくれただろうか。想像が膨らむ。子どもたちにも是非、この感動的な瞬間を見せてあげたいと強く思った。

脱皮後の皮
　早く脱皮をした他施設の保育士が、羽化の後、土の中に脱皮した皮が残っていることを教えてくれた。うまく丸まっている。カブトムシが一生懸命長い時間をかけて皮を丁寧に脱いだという証なのであろう。
ツノや手足の繊細な部分までもがきれいに残っている。

成虫とのご対面！　2021年6月

立派なカブトムシの誕生です！

　月曜日、子どもたちが登園すると、穴の中には羽化したオスの姿が。上から見ると少しずつ動いている様子がわかり、子どもたちも先週見た姿形とは違うことに気づき始めている。成虫の立派なツノにはまた皮が付いたままで**「なんかかぶっているよ！」**と子どもの声。確かに、まるで帽子のようなものをかぶってているように見える。後に取ってあげることになるが、今は無理に触ったり動かしたりするのは禁物、子どもたちと一緒にしばらく様子を見守ることにした。
　6匹のうちのメス1匹とオス１匹は、成虫の姿になったのは確認できたが、残念ながら土の上に上がってくることはできなかった。オス2匹とメス2匹は、徐々に動きが活発になり、「外へ出たいよ！」と言わんばかりに、顔を出してくるようになった。
　そして、いよいよ土の中でじっとしてられなくなったカブトムシたちを、伸び伸びと過ごせるように、広い飼育ケースにお引越しすることになった。

　その中のオスの1匹が、羽をうまくしまうことができなかったようで、背中の羽の部分がくしゃっとなってしまっていた。２歳児がその様子を見て、**「いたい、いたいね。」**と語り掛けていた。カブトムシの気持ちに寄り添い、出た言葉であろう。子どもの心の育ちに感動し、胸が熱くなった。

心配そうにカブトムシを眺める子どもたち

【考察】
　姿形がすっかり変わっているカブトムシに、子どもたちは、「なぜ急に変わったのだろう」、「不思議だな」と思っているようにも、久しぶりになじみのあるカブトムシの姿を目の前にして、どのように関わろうか考えているようにも思えた。すぐに触ったりつかんだりする子どもはおらず、「エサを食べるかな…」「元気に動くかな…」と、まだ様子を見ているようだった。子どもたちなりに、1年かけて育ててきたカブトムシの幼虫がいよいよ大人になった喜びと、急激な見た目の変化に、不思議な気持ちが残っていたのではないだろうか。1つ言えるのは、約1年間毎日お世話をし、成長を見守ってきたなかで、子どもたちにとって**愛着を持った大切な存在**になったということは間違いない。
　羽をうまくしまうことができなかったカブトムシを見て、「いたい、いたいね…」と感情移入する気持ち。これは、誰に教えられたことでもなく、子ども自身が素直に感じて口から出た言葉であろう。どのような姿や形でも、大好きなカブトムシには変わりない。カブトムシに対する思いやりと無条件の愛情が芽生えていた証、この気持ちは、カブトムシだけではなく、今後、子どもたちが出会うすべての生き物を大切にする心の育ちへの原点となってくれることだろう。

他施設では…
　カブトムシたちは活動を始めたようである。子どもたち曰く、「朝はまだ寝ているから静かに…」とそーっと覗き込んでいたり、たまたま朝に出てきていたカブトムシが急いで穴を掘っているのを見て、「おやすみー」と声をかけたりするそうだ。ここでも、カブトムシの気持ちに寄り添っている様子がみられている。他施設の子どもたちも愛着を持って大切に育ててくれていることが感じられ、つながりを感じられた。

カブトムシとの触れ合い　2021年6月

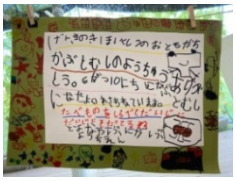
羽化したオス2匹、メス2匹のカブトムシたちを、各1匹ずつ２つのケースに分けて入れた。子どもたちが望んだときには飼育ケースの蓋を開け共に過ごしてきた。すっかり成長したカブトムシ。子どもたちは毎日ケースを開けてカブトムシとの触れ合いを楽しみにしている。

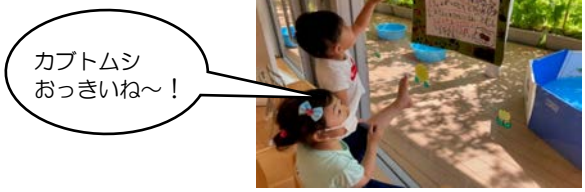
昨年は、「怖い！」と言って触ることができなかった子どもたちも、今では触れたい！という気持ちが高まり、自ら手を出して触っている。エサがない状態を見つけると、「エサをあげたい！」と1歳児までもが、積極的に関わろうとする姿がみられている。

毎日カブトムシを見ることを楽しみにしている2歳児が、カブトムシの姿が見えない時に、「あれ？いないよ？寝てるのかな…」と土の中を探そうとした。すると、幼児が「**ねんねさせてあげようね**」とそっと蓋を閉めた。それに対して「**うん**」と素直に納得する2歳児。異年齢保育の中、日頃からの信頼と積み重ねた関係があるからこそ、子ども同士で伝え合いそれを受け入れられた姿である。

ある日、他園からお手紙が届いた。「カブトムシをありがとう！元気にすごしているよ！」と書かれた手紙と写真が入っていた。

「元気にしてるんだね！」と嬉しそうにする幼児。手紙にたくさん描かれている絵と定規を当てたとても大きなカブトムシを見ていた幼児が、「カブトムシの絵を描きたい！」と突然言った。すると一緒に見ていた子どもも、「僕も！」と言い始めたのだ。すぐに紙とペンを用意すると、一生懸命描き始め、それを見ていた他の子どもたちも仲間入りした。すらすらと手が動き、かわいい子どもたちの想いが形になった。描き上げた絵を友だちや保育士に嬉しそうに見せに来る子どもたち。「うまく描けたね～」「カブトムシかっこいいね～。」と言うと、とても嬉しそうな表情を見せ、その絵を飾ると満足そうにしていた。





もらった手紙と子どもたちが描いた絵

【考察】

日頃「お絵描きをしたい」と子どもが好きな絵を描くことはよくあるが、このように自発的に対象物を描きたいということは今までほとんどなかった。育てているカブトムシに日々触れ、送ってもらった大きなカブトムシの写真や絵を見て、**心が動いた**のだろう。「描いてみたい！」「やってみたい！」という**自発的な行動が、「どんな風に描こうかな」と思考力や創造性**を膨らますきっかけにつながったと考えられる。子どもたちが「やり遂げた！」と、達成感を味わった瞬間でもあった。

このように、子どもの気持ちや声に保育士が敏感になりながら、自ら考える思考力や創造力を育み、子どもの気持ちが表現できるように、日頃から形にできるツールを用意したり、その使い方や技法なども保育の中で伝えていくことが大切であると感じた。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿「豊かな感性と表現」にあるように、**心を動かす出来事**に触れ、感性を働かせた子どもたちは、感じたことや考えたことを**自分の意志で**表現することができた。

そして、保育士は子どもたちの喜びや工夫に気づき認め受け止めた。そこから想いを形にできる**達成感**や**自信**に繋がり、更に**自発性、自主性**につながっていくと考えられる。

再び、お別れと出会い！　2021年7月末

毎日親しんでいたカブトムシが、朝登園すると動かなくなっていた。それを見た3歳児は、思わず「かわいそう…」と身体を撫でてあげていた。昨年味わった大切なカブトムシとのお別れが再びやってきたのである。幼児は悲しさを胸に感じ取っているようだった。

1，2歳児では、亡くなってしまったということの認識が難しい子どももいた。動かなくなったカブトムシを目の前に、今まで触ることが少し怖いようだった1歳児が、突然「ツンツン！」2歳児も、「ツンツン」と指で触り始めたのだ。そしてまた別の2歳児は、じーっとカブトムシの裏側の様子を見て、**「なんか、踊っているみたいだね！」**と一言。足が全部内側に曲がっていて、カブトムシが楽しそうに踊っているように見えたのだった。この発想は、私たち保育士も驚いた。

その後、メスも1匹亡くなってしまったが、飼育ケースを見てみると、なんと、卵が20個も生まれていた。既に孵化している幼虫の姿も発見し、子どもたちも興味深く見ていた。その中で、メスが亡くなったことを「なんで死んじゃったの？」と保育士に尋ねてきた3歳児。保育士が「う～ん…赤ちゃんを産んで安心したから死んでしまったのかな。」と答えると、**「きっと赤ちゃんに会いたかったやろうね。」**と一言。この言葉には保育士も心が打たれた。

【考察】

カブトムシが動かなくなってしまった途端、触り始めたり、各部分をじっくり観察したりする子どもたちがいた。幼虫の頃から親しみを持って関わってきたからこそ、動かなくても大好きなカブトムシに変わりないと心で感じ、「触れてみたい」と思ったのだろう。改めて年齢や個人差によって、生き物の命に対する捉え方、感じ方、興味関心の持ち方が違うことを感じた。

「赤ちゃんに会いたかったやろうね」と言った子どもは、登園後、毎日エサをあげていた。長期間、毎日大切に愛情を持って育ててきたからこそ**命の重さと尊さ**に気づいたのであろう。死んでしまって子どもに会えないと悲しいという、カブトムシの母親の気持ちになれる、この子どもの気持ちも本当に尊い。改めて、身近な動植物と関わる経験の中で、人や物の気持ちになり、**生命尊重の心**が育っていることを感じた。

昨年は1歳で、今は2歳の子どもたち。 亡くなったカブトムシを見て、**「僕たちが土に返してあげるんだ！」**とスコップを持って穴を掘り、埋めてあげる頼もしい姿が見られた。昨年のお別れの時に、年上の友だちが中心でやっていたことを見て覚えており、自発的に動いたのであろう。子どもたちの成長を感じられる一場面であった。

成虫がいなくなったケースの土を掘るとたくさんの卵が！そして、幼虫の姿も見られている。

他施設では・・・

お嫁さんをもらい、卵が生まれたとの報告が！元気の木保育室から、また尊い命がつながっていく喜びを改めて感じた。

また命がつながった。これから再びカブトムシを育てていくことになる。昨年から約1年が経過し、子どもたちもさまざまな経験を通して成長してきた。1つ歳を重ねた子どもたちが、今年はどのようにカブトムシと関わっていくのか、またどのような驚きや感動の姿を見せてくれるのか、楽しみである。

４．もうひとつの不思議、神秘、感動との出会い　（チョウの羽化）

2020年の9月、子どもがテラスでアオムシを発見。クネクネと動く様子に子どもたちは心を奪われた。保育士が「このアオムシ、どうする？」というと、子どもたちは「飼いたい！」と二つ返事。保育室にあった子どもたちの大好きな絵本『はらぺこあおむし』＜（1976）エリック・カール作　もりひさし訳　偕成社 ＞を見て、もしかしたらチョウチョになるのかな・・・と期待を持っているようだった。

カブトムシを育て始めて、約２ヶ月が経った頃だった。虫を育てるには、住めるお家をつくり、エサの用意が必要ということを、カブトムシの飼育の経験から学んでいた子どもたちは、自ら何が必要かを考え始めた。飼育ケースにあおむしを入れ、「なにを食べるのかな？」「クスノキの葉っぱじゃない？」と保育士から聞くと「じゃあ、取ってくる！」と園庭から枝や葉っぱを集めてきた。予想以上のたくさんのクスノキの枝や葉っぱが集まり、子どもたちのあおむしへの愛情が、葉っぱとともに飼育ケースの中にあふれかえった。

数日経つと、アオムシは動かなくなり、飼育ケースの側面でさなぎなった。絵本から“さなぎ”の存在を知った子どもたちは、毎日何が出てくるかを楽しみに見ていた。しかし、子どもたちの期待とは裏腹に、待てど暮らせど全く変化は見られない。さなぎになった時期によってはそのまま越冬することがあると聞いていたので、もしかしてこのさなぎもそうなのか・・・と、気を長くして待つことにした。冬の間は、飼育ケースを覗いてもさなぎが動き出す気配はなく、暖かくなるまで当面見守ることとなった。
動きがあったのは、なんと2021年の4月「あれ？緑だったさなぎが、黒くなってきていない？」と出勤した保育士が変化に気づく。変化を見せ始めてから2日後、子どもたちが登園してきた後、突然さなぎがゆらゆらと揺れ始めたのである。息をのんで見守る中、皮が割れて中から黒い羽が出てきた。「うわ～！」と思わず歓声があがる。子ども、保育士、その場所にいたすべての人が**不思議、神秘的、感動の**気持ちであふれかえる。自然の神秘に触れている時は、だれもが引き込まれて言葉が出なかった。子どもたちのまなざしも真剣そのものであった。

1時間ほどかけて皮を脱ぎ、その後は柔らかいしわしわの羽を乾かして、少しずつ羽を動かし始めた。3時間ほど経っただろうか、いよいよパタパタと活発に羽を動かし始めた。ケースをテラスに移動し、蓋を開ける。みんなが見守るその中、キラキラ光る美しい羽をひらひらと広げてチョウチョは飛び立った。アオスジアゲハだった。「バイバイ～！」と手を振る子どもたち。本当に神秘的で感動的な瞬間に立ち会うことができた。

お別れをしたかと思うと、なんとそのアオスジアゲハは、園庭のシロツメクサに止まり、しばらく動かなくなった。蜜を吸っているようだ。**「お腹が空いていたのかな～！」**誰もが元気に飛び立っていくことをイメージしていたため少し拍子抜けをしたが、ちょうどその日はテラスで給食を食べる日、子どもたちが食べている間中、ずっとシロツメクサの蜜を吸っていた。そして、子どもたちが食べ終わり午睡を始めた頃、飛び立っていった。子どもたちが食べている間、飛び立たずに待ってくれていたのかもしれない。約8ヵ月間見守ってきたチョウチョに、「感動をくれてありがとう！」という気持ちでいっぱいだった。

【考察】
自然の神秘と出会った瞬間、だれもが言葉がでなかった。本当に驚いたり感動した時は、言葉が出ないものなのかもしれない。いつもは賑やかな保育室がシーンと静まり返っていた。保育士も本気で感動している姿は子どもたちの心に伝わり、**共に感動体験を味わうことで心が動いた**尊い時間だった。
また、チョウチョが羽化し始めたとき、数人の乳児が怯え保育士の膝に乗ったり抱っこを求めてたりしてきた。ここでも、大人は経験から「さなぎから出てくるのはチョウチョだ」と認識しているが、初めて見る子どもにとっては「得体のしれない未知の生物の誕生」に思えたのだろう。当然の反応だ。だが、この**未知との出合い**の1つ1つが子どもたちの世界を広げ、ワクワクを作っていく。今回のチョウチョとの出会いが、子どもたちの新しい世界をまた1つ広げたことは間違いないだろう。

5．まとめ

昨年夏の2匹のカブトムシとの出会いから約1年、**出会い、別れ、そして発見、不思議、驚き、感動**など、カブトムシを通して、さまざまな**科学する心**が育ってきた。
はじめは近くで見ることすら怖くてできなかった子どもが、今ではカブトムシをつかみ触れ合えるようになり、「カブトムシ」と言えなかった子どもが、「カブトムシ、かわいい！」と言いながら嬉しそうに観察するようになった。また、毎日登園後、真っ先にカブトムシのところへ行き、霧吹きで水やエサをあげる子ども、土を替える時に幼虫よりうんちに興味を示し、ずっと触っていた子どもなど、成長した部分や惹かれるポイントはさまざまであったが、一人ひとりが興味のあることに積極的に関わり、発見や驚き、感動や不思議などを経験しながら心を動かしてきた。

心を動かし自ら関わって感じることで、科学する心を育くむことにつながった。その結果、子どもたちの自発性や自主性、創造性も育まれ、そこから意欲、自信を持つきっかけにもなった。また、カブトムシの死や卵、幼虫の誕生を通して命の不思議や尊さに気づき、大切にしようとする心の芽生えも見られた。カブトムシの成長と共に子どもたちの大きな成長を感じることができた1年であった。

育まれた生命を尊重する心

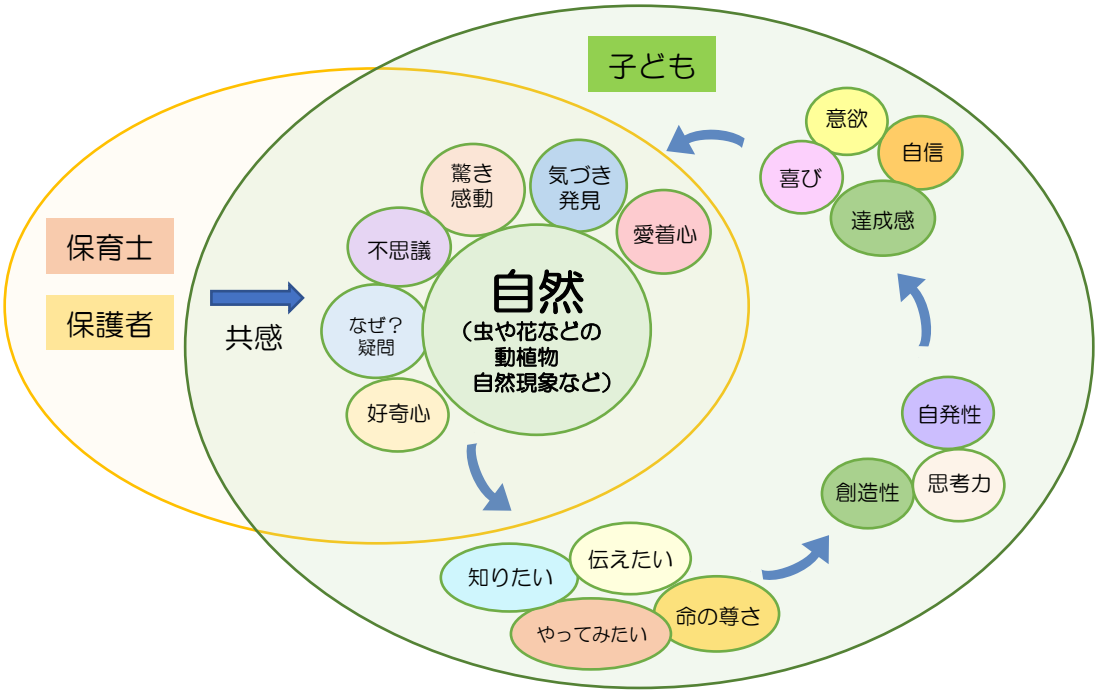
昨年夏にカブトムシが死んでしまった時には、「生き物の死」に対して理解できないままの子どもが多かった。だが、あれから一年、カブトムシを含め、その他の飼育物の死に対面してきた子どもたちの心に大きな変化が表れている。

ある日、保育室の隅に、一匹のヤモリが死んでいた。保育士と一緒にそれを発見した4歳児が数日後、朝の自由遊び時間に黙々と何かを描いていた。「先生、これ」と持ってきたものは死んでしまったヤモリへの手紙だった。そこには、**「死んじゃってかわいそうだったから」**と、ヤモリの絵が描かれていた。**「お腹に赤ちゃんがいるの！」**見るとヤモリのお腹に小さな顔が描かれていた。ヤモリの死に直面し、心が動いたことで手紙を書こうという行動に出た本児の優しさ、思いやりに心を打たれた。赤ちゃんがいたら、また生まれてきてヤモリに会えると思ったのだろうか。この心の動きはさまざまな経験を経たからこそ得られた賜物だと考える。後日談として…この数日後保育室にヤモリが現れた。4歳児と「もしかしてお手紙書いたから？」「死んじゃったヤモリの赤ちゃんかも！」「きっとそうだね」と喜んだ。保育士が捕まえ飼育ケースに入れると「かわいい～」と、とても愛おしそうに眺め、しばらくすると「逃がしてあげる」とテラスに逃がしてあげていた。偶然かもしれないが、本児の思いがヤモリに通じ、再び姿を見せてくれたのではないだろうか。

また、別の日、死んでいるセミを捕まえた2歳児が、「虫かごに入れたい」と言ってきた。「でも、このセミさんもう動けないから、土に埋めてあげようか」と声をかけると、悲しそうに**「土に埋めたら幼虫になる？」**と聞いてきた。死んでしまって動かないことを自分のなかで受け止めようとする表情、埋めてあげたら、また幼虫になりセミになって会えるのかな？と一生懸命考えたのだろう。

単なる「虫の死」ではなく、それぞれの生き物に対して、「**生命を尊重する心**」を持って接することができた二人の心の成長に「体験し感じること」の大切さを実感した。

自然との関わりや体験を通した心の育み



子どもは、自然や生命に触れ「不思議」「感動」を感じることで、「知りたい！」「やってみたい！」という感情が生まれる。そこから生まれた自発性・自主性、創造性により実際の行動につながる。そして、想いを実現することで、喜び、自信、達成感につながっていくと考える。さらに大人もまた自然に触れて同じように感動する心を持ち続けることが大切であり、友だちや身近な人が共感し、気持ちや行動を認め褒められることで、自信へとつながり、さらなる意欲につながっていく。この繰り返しを通して、感性が磨かれ心が育まれていくと考える。

子どもの未来を守る環境

2019年にオーストラリアの研究者が発表した研究論文によると、世界の昆虫種の４０％以上が減少し、今後数十年で絶滅の可能性があるそうだ。＜ナショナルジオグラフィック　日本版Webサイト https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/19/021700110/＞

確かにカタツムリやクワガタ、カブトムシまでも、昔は身近にたくさんいた虫が減ってきているように感じる。昆虫は、植物の受粉を担ったり、動物の食料となっているため、昆虫が減少していくことで生態系が崩れてしまうと考えられる。

子どもたちの成長に重要な役割を持つ自然を維持し、将来安全でよりよい生活がを送れるように、会社としても取り組んでいる環境問題への意識を高めたいと考える。SDGｓ（持続可能な開発目標）の実現に向けて、保育室でも子どもたちと一緒にできる、以下のことを取り組んでいきたい。

畑で野菜を育てるなど、食育を通して健康な体と、食べ物を大切にする心を育む

さまざまな体験を通して、気づきや感動する感性を磨き、生きる力を身につける

手を洗う大切さや、水を大切にすることを伝え、安全な衛生環境を維持する

自然光を取り入れながら、電気の無駄遣いを減らす

廃材を活用した保育をするなど、無駄をなくし物を大切にする心を養う

樹木や植物に触れ、一緒に育てながら、緑を大切にする気持ちを育む

男女児を分け隔てることなく多様性を認めながら、仲良く遊べる環境をつくる

子どもの成長を伝え、保護者が安心して子どもを預けて働ける環境をつくる

食料・飲料の備蓄をし、あらゆる災害を想定した訓練を行う

6．考察に基づく課題と今後の方向性について

低年齢児が多いため、この1年保育士による働きかけや環境づくりにも力を入れてきた。今年度は新たに1歳児が入園し、在園していた子どもたちも一つ学年が上がっている。卵が生まれ幼虫になり、今年もカブトムシを育てていくことになったが、子どもたちは、昨年とは違う新たな気づきを得たり、さらに自発的な関わりをしていくだろう。保育士は子どもの変化や発言、行動に敏感になり、感覚を研ぎ澄まし、心の動きを感じ取り、その思いを形にできるように、年齢や興味に合わせた関わりや環境づくりをしていきたいと考えている。また、カブトムシを育てる中で育まれてきた好奇心や感性、生命を尊重する心などを、子どもたちが今後生きていく中で自然や人との関わりに活かすことができるように、保育士たちは丁寧に関わっていきたい。

現在、保育室には、幼児は4名（4歳児2名、3歳児2名）しかいないことから、異年齢の関わりはできるが、同世代の関わりや刺激が他園よりも少ないことが課題である。今回カブトムシを通して他施設との交流をすることができ、子どもたちも一緒に育てている仲間意識を感じることができたと思われる。今はコロナ禍ということで、行き来することは難しいが、オンラインなどでカブトムシの成長を報告し合ったり、子ども同士の交流を行いたいと考えている。現在、新型コロナウイルスについてのマイナス情報ばかりが蔓延するが、遠く離れている子どもたちともつながれるという、新たな前向きな手段に注目することができた。関連施設のみならず日本全国、また海外の子どもたちともつながれる環境にあり、新たな出会いが広がっていくかもしれないと考えるとワクワクする。これからさらに活動の幅を広げ、刺激を受け合える場を作っていきたい。

7．さいごに

子どもたちが自然に触れながら、さまざまな経験をする中で、保育指針の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、育みたい「３つの資質・能力」、知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等が身につき、卒園した後も必ず生きる力になると信じている。人間の基礎をつくる時期である乳幼児期にたくさんの経験をし、大人になっても身につけた力を活かしていってほしいと願っている。

元気の木保育室の保育士たちは、子どもたち同様、日々の自然の中でさまざまなものを発見し、驚きや不思議を感じながらいつもキラキラと輝いている。周りの大人が**「すごい！」「不思議！」**と感じ、共感し合うことはとても重要なことであると考えるため、保護者にも随時報告し、登降園時には一緒に見ていただいた。子どもたちと同様に感動したり、驚いたりすることで、家庭での会話につながり、子どもたちの伝えたいという意欲にもつながった。保育室を囲むみんなで、カブトムシと子どもたちの成長を見守ることができた。また、カブトムシの飼育に関して会社の方々にはたくさんご協力をいただいた。子どもたちへのレクチャー、土やエサの用意、そして何より何度も足を運んでくださり、カブトムシの成長を子どもたちと一緒に喜んだり驚いたりしてくださった。この共感が子どもたちにとって喜びとなり、人と関わりたいと思う気持ちや信頼感が育まれたと考えられる。

レイチェル・カーソンの著書『センス・オブ・ワンダー』＜（1996） レイチェル・カーソン著　上遠恵子　訳　新潮社＞にあるように、 子どもだけでなく大人にとっても**「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要でない。**ものを美しいと感じたり、新しいものや未知なものにふれた時の感激、さまざまな感情が動いたとき、もっと知りたいと思い、見つけ出した知識はしっかりと身につく。神秘さや不思議さに目を見はる感性に、保育士である私たち、保護者、周りの大人が磨きをかけることで、未来を担う子どもたちが、自然に触れながら心身ともに健やかに成長し、豊かな感性を持ち続けられるように、これからも一緒に心を動かしていきたい。

協力園：社会福祉法人イーキッズ　千僧森のほいくえん　　特定非営利活動法人e-kids　伊丹森のほいくえん
学校法人　とよなか文化幼稚園

株式会社　ロック・フィールド　神戸ヘッドオフィス
神戸ファクトリー
元気の木保育室
運営受託　特定非営利活動法人e-kids

研究代表者：岡﨑優季
研究・執筆者：井口めぐみ・定久恵美・嘉陽田利央菜
秋江彩・髙見香織・小林ゆかり